

## 上古音「侵部」「冬部」をめぐって

野原将揮

### 1.はじめに

顧炎武 10 部説から始まり、Karlgren 等による押韻字研究、諧声符研究、そしてその修正を経て大枠の上古音体系が確立されつつある。また、新たな出土資料の発見等によりこれまで制限を余儀なくされてきた上古音研究も更なる注目を浴びている。このような近年の状況において、今後はより一層の仔細な研究を要する。そこで小稿では侵部と冬部について概観することにしよう(注1)。

### 2. 「侵部」・「冬部」

一般的に「侵部」「冬部」は次のように推定される。藤堂明保(1985)によると、侵部は唇音韻尾に属する。音価は/-əm/である。冬部は舌根音韻尾に属し、音価は/-oŋ/である。研究者によって音価には多少の出入りがある。それについては後述することにする。では侵部に属する字が中古音ではどの韻目に変遷するのだろうか。以下に示す(藤堂1985)、

#### [冬部 陽類 oŋ]

<等>	<例字>	<上古>		<中古>	
1	冬	toŋ	→	toŋ	冬韻
2	降	fiŋ	→	fiŋ	江韻
34	宮	kiŋ	→	kuŋ	東韻

冬部に収められる字は通攝字ばかりである。

#### [侵部 陽類 əm]

<等>	<例字>	<上古>		<中古>	
1	南	nəm	→	nəm	覃韻
2	咸	fiəm	→	fiəm	咸韻
3	今	kiəm	→	kiəm	侵韻
4	心	siəm	→	siəm	侵韻
4	潜	dziəm	→	dziəm	塩韻
仮4	墊	təm	→	tem	添韻

このように侵部の多くが侵・咸攝に属するものばかりであり、上古\*/-m/韻尾がそのまま中古\*/-m/韻尾になると予想できる。しかしながらその予想に反する字もある(注2)。

<等>	<例字>	<上古>		<中古>
34	風	pliem	→	pluem → puŋ

「風」は『広韻』では東韻に属する字である。どうやら上古では/-m/韻尾であったようだ。その根拠は諧声系列にある。「風」は「凡」を声符とするからである(注3)。「凡」は『広韻』の韻目代表字であるから凡を声符とする字が上古\*/-m/韻尾とするのは妥当である。同様に、「凡」を声符にもつ「凡」もその例として挙げることが出来る。『広韻』では東韻に収められるが、「凡」を声符に持つ字であるから上古では/-m/韻尾とする。「風」「凡」はどちらも唇音声母、唇音韻尾を有することから異化作用が起こり、

/-m/韻尾が/-ŋ/韻尾へと変化を遂げたと考えることが一般的だろう。

### 3. 諸説

『詩経』には中古で/-ŋ/韻尾の字が/-m/韻尾字と押韻する字があることに注意したい。

「秦風」小戎                      騏駼是中                      駟驪是駟  
 「豳風」七月                      二之日鑿氷沖沖                      三之日納于淩陰  
 「大雅」蕩之什 蕩                      天生烝民 其命匪諶                      靡不有初 鮮克有終

このような『詩経』の押韻字は上古音推定にどのような影響を与えるだろうか。江有誥『音楽十書』、段玉裁『説文解字注』「六書音韻表」とも同様に合韻という立場をとっている。王力(1980)は上記のような押韻例を根拠に他の研究者が冬部と看做した字を侵部に収め、時代の推移と共に中古にはそれぞれ侵韻・冬韻等に分離していったと考えている。そのほかにも嚴可均、後の章丙麟等も同様の立場である。もちろんそれは異化作用によって説明される。しかしその異化作用は上述の唇音声母と唇音韻尾のそれとは異なる。上記『詩経』の「中」字は上古・中古において舌音系声母を有している。「終」字は中古では照母三等系声母(章母)であるが、照母三等系声母は舌音系と関連性がある。そのため上古では舌音系であると考えられるのが妥当である(注 4)。つまり「風」や「芄」字のような唇音声母と唇音韻尾の異化作用は起こり得ない。そうすると次に考えられることは、u 介音と唇音韻尾の異化作用だろう。王力はこの u 介音と唇音韻尾の異化作用を採る。王力の上古から中古への変化の説明は以下の通りである(王力 1980)、

\* /uəm/      →      /uəŋ/      →      /uoŋ/      (冬)  
 \* /oəm/      →      /oəŋ/      →      /oŋ/      (江)  
 \* /i̯wəm/      →      /i̯wəŋ/      →      /i̯uŋ/      (東)

王力の東部・侵部の投影をまとめると以下ようになる、

東部・・・・・鐘韻・江韻、東韻一等  
 侵部・・・・・侵韻・覃韻・咸韻・冬韻、東韻三等

しかしながら、王力が如く冬部と侵部をひとつに収める研究者はそれほど多くない。例えば、董同龢(2001)は侵部と冬部を分け、冬部に/-ŋ/韻尾を推定している。そのほか蒸東陽耕部も同様に/-ŋ/韻尾としている。Karlgrenは始め東部・冬部を分部しなかったが後に東部・冬部を分けている。Baxter(1992)は冬部に/-ung/を推定している。李方桂(1980)も同様に冬部を立てるが、董同龢・Karlgrenとはその推定韻尾に違いが見られる。李方桂の冬部の推定韻尾は\*/-ngw/で円唇性を帯びた舌根音であり、その根拠に上記『詩経』のように侵部と合韻していることを挙げる。また方言によっては/-m/韻尾と/-ngw/韻尾を混合しているところもあったとしていることにも注意したい。以下、李方桂(1980)における上古から中古における変化を挙げる、

<等>	<例字>	<上古>	→	<中古>
1	冬	təngw	→	tuong
2	降	grəngw, krəngwh	→	yang, kəng
3	中	trjəngw	→	tʃjung
	終	tjəngw	→	tʃjung

このように円唇性喉音韻尾が消滅し、韻複が円唇化傾向にある。李方桂は上古声母に/khw-/のような円唇性を有する声母を推定しているが、冬部・幽部に限っては円唇性喉音声母が推定されていない。本来、円唇性喉音声母を有していたものが円唇性喉音韻尾の影響で脱落したのか、それとも元々声母が円唇性を有していなかったのかは明確には出来ないとしている(注5)。ここで言う円唇性喉音韻尾を推定するに至った背景についてはやはり頼惟勤(1953)を挙げないわけにはいかない。頼惟勤「上古中国語の喉音韻尾について」のなかで喉音韻尾を有する上古部を二系統に分け、介音、韻尾、二等韻の性格、古いタイ語借音等と仔細に考察する。二系統とはひとつがⅠ類「幽冬侯東宵」、そしてもうひとつがⅡ類「佳耕之蒸魚陽」とする。説明を展開した上で、Ⅰ類・陽韻尾の喉音韻尾に円唇性を帯びた音を推定している。詳細は頼惟勤(1953)を参照されたい。また切韻系韻書の配列順にも注意を施し、Ⅰ類・「幽冬侯東宵」の陽韻尾——つまり冬部東部——には韻書の中で一番初めに現れる通撰が多く含まれ(中古音、東冬鐘江韻等)、Ⅱ類・陽韻尾——つまり耕蒸陽——には韻書の中盤で現れる宕梗撰(中古音、侯庚耕清青蒸登唐陽韻等)が含まれていることを挙げていることも興味深い。つまりⅠ類・陽韻尾とⅡ類・陽韻尾の相違が韻書の配列順序に何かしら影響を与えていることを予想させるのである。事実、Ⅰ類に含まれる中古韻目には開合の区別がなく、反対にⅡ類に含まれる中古韻目には開合の区別があるという報告もある。また上述したように『詩経』の押韻例に、侵部と押韻する冬部字が幾つかある。それら冬部に含まれる字が切韻系韻書の始めに現れる通撰のみであることも興味深い事実である。韻書の最初に現れる字と韻書の最後に現れる字が円唇性韻尾を有していたと考えさせられる。

#### 4.まとめ

以上、侵部・冬部についての諸説を幾つか挙げた。詩経音系と諧声音系を同時代的と看做すか否か等の問題もあるが、王力が如く冬部を侵部と看做すのは必ずしも納得のいくものではない(注6)。しかしながら、『詩経』で侵部と冬部が押韻していることもまた事実である。切韻系韻書の配列状況から冬部には何かしら合口的な要素を含んでいた可能性があることも上で述べた。そういったことから冬部には円唇性を帯びた喉音韻尾\*/ŋʷ/を推定するほうがより妥当ではないだろうか。地方によって\*/ŋʷ/韻尾と\*/-m/韻尾を混合していたことも考慮に入れなければならないだろう。それを上古全体の体系と看做すか、一地域的な体系と看做すか、それは考を待つことにしよう。拙稿(2006.9)で『上博楚簡』「宋人」から今本礼記「南人」の変化を音韻論的解釋の視点から考察した。「宋」の中古音韻地位は心母通撰冬韻一等上声、「南」は泥母咸撰覃韻一等開口平声である。一見するとあまり関係がないように思うが、実は上古ではそれぞれがまさに小稿で挙げた「冬部」と「侵部」に当たるのである。さらには「宋」を声符に持つ幾つかの字が中古では覃韻に収められているのである。何らかの関連性があることを期待せずにはいられないが、このような根拠数の少なさ、上古音の難しさを考慮に入れるとやはり消極的にならざるを得ないのが現状である。今後の出土資料の検証・考察如何によっては異なった推定も必要になるかもしれない。

注1. 東部と冬が同音のため冬部を中部とすることもあるが、ここでは冬部とする。

注2. 「風」字も他と同様に藤堂明保(1935 p.313)に依った。/plēm/の/-l-/は「風」を声符にもつ幾つかの字が来母であることに依るものだろう。例えば「嵐」がその代表字

である。そのため複声母としてこのように推定されていると考える。

注3. 「風」は説文で从虫凡声である。

注4. 黄侃『音略』参照。該書において舌音と正歯音との関係が述べられている。また藤堂明保(1980,1985)では諧声系列を用いて舌音と正歯音を考察するだけでなく、韻図の舌音、正歯音を観察することでその関係性を考察している。

注5. 李方桂は牙喉音声母を次のように推定している。表は李方桂をそのまま参照した。

	塞音	鼻音	通音
喉音	·		h
円唇喉音	·w		hw
舌根音	k kh g	hŋ ɲ	
円唇舌根音	kw khw gw	hŋw ɲw	

表中にはないが、唇音(p系)は元々円唇性を有するため/w/を表記する必要はないとしている。唇牙喉音以外に/w/を推定しない理由は中古音の合口字の配列状況に因る。また中古音合口を上古の円唇性牙喉音声母に起源がある点も興味深い。紙幅の関係上仔細は李方桂(1980)参照されたい。

注6. 藤堂明保(1980,1985)によれば、詩経音系と諧声音系の出入りは幾つかの例外を除いて、ズレはほとんどないようである。とすればやはり同時代的なものと判断するのが穏当だろうか。

### <参考文献>

- 陳新雄『音略證補』文史哲出版社 1978  
董同龢『上古音韻表稿』中央研究院歷史語言研究所 1944  
董同龢『漢語音韻学』中華書局 2001  
江有誥『音楽十書』中華書局 1993  
段玉裁『説文解字注』「六書音韻表」  
李方桂『上古音研究』商務印書館 1980  
王力『詩経韻読』上海古籍出版社 1980  
王力『漢語史稿(重版本)』中華書局 1980  
鄭張尚芳『上古音系』上海教育出版社 2003  
頼惟勤「上古中国語の喉音韻尾について」『お茶の水女子大学人文科学紀要』1953  
藤堂明保『中国語音韻論 その歴史的研究』1980 光生館  
藤堂明保 相原茂『新訂中国語概論』大修館書店 1985  
拙稿「戦国楚簡「緇衣」における“宋人・南人”をめぐって」『KOTONOHA』46号 2006.9  
B.karlgren 1954 *COMPENDIUM OF PHONETICS IN ANCIENT AND CHINESE* BMFEA  
Baxter William H 1992 *A Handbook of Old Chinese Phonology* Mouton De Gruyter.